

2016 仮説実験授業 夏の全国合宿研究会 群馬 伊香保大会

大会報告

2016伊香保大会実行委員会 代表 品川 正

「仮説実験授業 夏の全国合宿研究会 群馬伊香保大会」は、2016年7月27日（水）～29日（金）の3日間、伊香保温泉「ホテル天坊」を会場にして開催されました。

【参加者数】	343名（家族を含めると379名）
【資料総数】	398本（資料提出者数166名）
【分科会の数】	33分科会（53コマ）
【ナイターの数】	1日目 16本 2日目 20本
【売り場】	84店舗 イタクラ係数 0.89 ※ ※今回、分子の値を〈その会において参加者が満足するために動いたお金〉と考え計算
【サマースクール】	16名
【保育】	3名
【感想文の数】	173枚（回収率51%）
感想文での評価	
5 とてもたのしかった	148枚
4 たのしかった	23枚
3・2・1は、なし	
評価未記入	2枚
【次期大会開催地】	長崎
〈期日〉2017年7月30日（日）～ 8月1日（火）	
〈会場〉ホテル清風（〒852-8005 長崎市大鳥町523）	

以前に一度「冬の大会」を経験している群馬は、その冬の大会の参加者数と、他県での大会参加者数との比較から「夏の大会も例年

に比べて少なくなるだろう。でも 300 人ぐらいは来てくれるのではないか。350 人の参加があればかなりよし。多くても 400 人は越えないだろう」との予測の元に、様々な計画を立てていきました。結果として 343 名の参加者数は、ほぼ予想通りといえます。

昨年、東京大会で立候補したときに「会場ホテルに泊まってもよし、泊まらなくてもよし」ということを打ち出し、群馬に決定した経過から、どちらの参加者にも喜んでもらえるような大会運営になるように、知恵を絞って企画を考えました。



今回の大会では、こだわったものがいくつもありますが、特にこだわっていたのは「売り場を一カ所にまとめる」ということでした。そして、「できるだけ売り場に人が来るような工夫をする」。この考えを大切にして、ホテルとも交渉してきました。

売り場

店舗数の申し込みは 84 店舗でした。売り場の受け付けとレイアウトは、群馬の峯岸昌弘さんが担当してくれました。何度もやり直し、参加者の動線を考えて完成してくれました。売り場に関する良い感想を沢山もらうことができました。

●家内の実家からの「通い」だったので「合宿」はできませんでした。年1回、楽しい雰囲気をもっと味わいたかった。売り場に談話コーナーがあったり、ブラボー券があったりするのでもっと素晴らしい試みだと思いました。分科会はもちろんのことですが、売り場や立ち話で仮説の話が深まり、盛り上がるのがこの研究会の素晴らしいところ。売り場重視の方針はいいですね。スタッフの方々お疲れ様でした。ありがとうございました。

(5 愛知 林泰樹さん)

●夜、8:00を過ぎた頃より、売り場のあちこちで自然発生的に人の輪が出来、にぎやかな談笑の声、声。「ああ、仮説の大会だなあ」と実感した瞬間でした。もしかするとこれが仮説の大会を一番象徴するような場なのかもしれません。実行委員会のアイデアによって、すべての機関を「売り場」に終結させることで、そうした人の輪が、より親密に濃密に膨らんだと思うのです。素晴らしい運営の仕組みでした。「衣・食・住足りて・・・」という言葉があります。「食べること、部屋の場所の設定、そしてお風呂」すばらしく快適でした。だから、分科会などの研究活動に集中することができたのだと思います。「交通の便がよくない」というのは、最初は欠点のように感じていましたが、普段の生活圏から、遠く離れた辺境だからこそ、いつもの日常生活のルーティンから完全に解放された、時間や予定を気にすることなく大会に没頭できたのだと思います。一言で表現するとすれば、漢字が思い浮かびませんが、「爽快な大会」でした。品川さん、そしてスタッフのみなさん、ありがとうございました。(5 京都 黒田康夫さん)

〈売り場内に本部（ラウンジ）を設置する〉という案は、群馬の森下知昭さんと川島滋弘さんが考え出してくれました。売り場では、大会中に自然発生的に人だかりができる様子が、いろいろな大会で見られます。でも今回は、〈目的意識を持ってそれを仕掛ける〉ということをしてみました。〈売り場の中に本部を設ける〉〈そこをラウンジにしてひと休みできる場所にする〉〈何かの情報が欲しいとき、落とし物や資料代の配布なども、売り場に足を運んでくれると解決

できる〉〈そして、自然と売り場を眺めることができるようにする〉という工夫です。これは、とても好評でした。

ただし、これは毎年出来るかどうかは、会場との関係があるので分かりません。伊香保大会ではそれが可能でした。



分科会設定

分科会設定は、東京の中一夫さんと岩手の大久保卓身さんの両名を中心に、設定準備をしてもらいました。当日の分科会設定の司会は、峯岸さんがやってくれました。また、当日の設定を円滑に、わかりやすくするために、前泊から東京の小澤俊一さんが用意してくれた「全体会場用のボード」が活躍しました。また、森下さんの「資料一覧を1枚にまとめる」という新しい工夫も取り入れ、本番の設定に臨みました。その結果、とてもスムーズに設定ができたと思います。分科会では「お楽しみ分科会」という企画も、新しく提案することができました。



また、今回は、「仮説会館」と題して、新しい3つの授業書案〈マ

メとさや〉〈自動車と歴史〉〈グラフで考える経済〉の検討をするという分科会を新設し、多くの人が体験できるよう3日間設定されました。

●大会ホテルへの直接申し込み有り、資料代のこと、分科会設定、ガリ本ダービーのやり方、ブラボー券の試み、などなど他にも参加者が気持ちよく過ごせるような試みをしてくださり、ありがとうございました。分科会、全体会にもスムーズに参加して楽しめました。板倉先生のごことは、何とも（今は）言葉に出来ませんが、シメタは、すでにあると思っています。わたしなりに研究会員としてできること（ちょっとでも）あると思うので、これからもよろしくをお願いします。 （5 佐賀 日吉資子さん）

●お楽しみ分科会の設置、とーっても“お楽しみ”できました。科学おもちゃの紹介や、今や絶滅危惧おもちゃの「地球ゴマ」の実演など、テンポ良くカリスマバイヤーみたいな言葉の魔法に、2万円のゴマをget。ものの整理収納のノウハウも、実生活の中ですでに使えるって事で、帰ったら少しばかり頑張ってみよう…。最終日の公開授業《三態変化》。夏の大会のシメにさせていただきました。寄り集めの集団（5～12才）作りたてホヤホヤの学級での平林先生の授業、年齢差のある子どもたちの言葉遊びの導入も楽しく、目の前での実験も子どもの感嘆のため息ともとれるものですごーく実践のヒントとなりました。ありがとうございました。 （4 沖縄 仲地和美さん）

全体会

今回は、何と言っても板倉聖宣先生が参加できなかったことが、とても寂しく残念でした。直前の新潟の東養寺で行われた「心円祭」に参加して下さった時には、夏の伊香保大会にも参加して下さる気持ちに溢れていました。入院されたと聞いたときにはとても驚きました。でも、大会は、板倉さんのいない寂しさを感じさせないぐらいの、とても温かな雰囲気と皆さんの笑顔で全体会が行われました。



全体会1日目は、川島滋弘さんの司会で、とても穏やかに進行されました。

はじめに、〈マメとさや〉の授業を体験した子どもたちの様子や感動を、私（品川 正）の授業記録をもとに、30分程度で発表させてもらいました。6月に入った頃、板倉先生が「今年の夏の大会の全体講演で、品川さんに発表してもらいます」と言われたことで、大会運営をしつつの発表ということになりました。自分としてはドキドキしてしまい、「こんな大切な時間を自分がつかっていいものかな」とも思いましたが、板倉先生の要望だということで、やらせていただきました。

その後の分科会設定は、峯岸さんの進行で、テキパキと進められました。設定後の各分科会の説明などに、時間を長めにとれたことは良かったです。新しい取り組みなどの説明にも、十分な時間をとることができました。

2日目は、平林浩さんと小原茂巳さんのお2人が、スムーズに進行してくれました。全国委員の紹介、事務局長の犬塚清和さんからの会計報告の後、次期大会の開催地決定へ。

今回は、長崎の立候補のみということでしたが、立候補者の熱い演説を聞いて、承認の拍手がありました。例年のように複数の候補

の演説が聴けなかったのは少し残念でしたが、長崎の力強い演説を聞いてとても安心しました。

また、今回は板倉先生が来られなくなってしまって「板倉賞」のイベントがありませんでした。それならば、〈「伊香保大会実行委員会賞」を作ってお渡しするというのはどうか〉という話が急速にまとまりました。実行委員で話し合った結果、この大会のために多大なる貢献をしてくれた平野孝典さんにお渡しすることになりました。



平野さんは、今回の伊香保大会で全員配布された、新しい3つの授業書案がまとめられた『仮説会館&板倉研究室 研究紀要』（224ページもある本）を、急遽まとめることになり、寝ずの作業を続け、前日準備にすべり込みで間に合わせてくれたのです。



実行委員会賞といっても、花束だけなのですが、実行委員の品川美里さんから、平野さんに渡してもらいました。会場からは温かい拍手がわき起こり、ちょっと照れくさそうでしたが、平野さんも受け取ってくれました。その花束を、平野さんは「日頃から苦勞をかけているから」ということで、その場で奥様に渡すという場面が見られ、会場の拍手はさらに大きく響き渡りました。実行委員会のメンバーも「この企画は、やって良かったね」と喜び合いました。

最終日、最後の全体会では、各分科会からの報告があった後、ガリ本ダービーの結果発表がありました。なんと1位は、「ガリ本ダービーがやりたいです！」と企画した、群馬の峯岸さんの『たのしいマット運動への道』（オレンジ資料館）のガリ本が取りました。自分で賞状を作っていたのですが、自分で渡すこともできないので、私

が渡すことになりました。これも、参加者の皆さんのおかげで、とても温かい雰囲気の中で発表を終えることができ、ありがたかったです。

また、司会をしてくれた群馬の栗原正治さんから、県別の人口比による参加者数のクイズも出されました。いろいろなことを予想して、大会の運営をたのしんできた実行委員の様子を、参加者の皆さんにも感じていただけたのではないのでしょうか。

最後に、次期開催地である長崎からの挨拶が終わり、群馬から長崎へ〈仮説の火を渡す〉というセレモニーが行われ、川島さん作成のくす玉（紙たつまきハイパー）を引きました。テープと共に、まるで優勝したときのような雰囲気の中に、伊香保大会の幕は閉じました。

●会場と売り場と講座の部屋が、とても分かりやすく、動きやすく、いろんな方とおしゃべりができて、自分の発表もでき、他の先生方の発表も良く、勉強になり、本当にすてきな充実した会でした。そして板倉賞に代わる大会賞、本当にすばらしく、こちらまで幸せになりました。皆様の温かな心配り優しさでいっぱいのお会、この3日間、本当に充実した日々でした。心からお礼申し上げます。暑い日が続きますがどうぞ皆様、ご自愛ください。

(5 愛知 山田芳子さん)

サマースクール

サマースクールは、東京の黒田礼子さんと、長野の北村知子さんが担当してくれました。また、私の教え子で、教員をめざしている3人の男子学生にも手伝ってもらいました。1日目は、「劇団あかばんつ」の上演があり、子どもたちはとても楽しんでいました。その後は、〈おりぞめ〉で〈ものづくり〉ということで「牛乳パックで和風ペン立て」の制作を楽しみました。

2日目は、会場の近くにある「グリーン牧場」で、日中、思いっきり遊びました。学生さん3人も、全力で子どもたちと走り回ってくれたようです。会場に戻ってきてからは、前日にやった「和風ペ

ン立て」の仕上げを熱心にやっていました。

3日目には、平林浩さんの《三態変化》の授業を十分に楽しみました。これは公開授業にもなっていたので、何人かの参観もありました。終わってから子どもたちに感想を聞いたら、「とっても楽しかった。またやりたい」と言っていました。

保育

保育は、群馬の新井昌子さんと品川美里さんが担当してくれました。現役で保育士をしている大澤さんが、経験を生かして安心できる保育をしてくれたようです。初日は「劇団あかぱんつ」の上演をサマースクールの子どもたちと一緒に参観しました。また、保育を希望したお母さんの要望から、バンジーチャイムや仮説の方々による読み聞かせなどのイベントも生まれ、充実した保育になったようです。

ナイター

本当にたくさんのナイターが企画・運営され、用意していた会場だけでは足りないぐらいの盛況ぶりでした。初日は16本、2日目は19本の申し込みがあり、全ての会場を使い切って行われました。担当された、栃木の遠藤郁夫さんが上手に調整してくれて、申し込まれた全てのナイターを実施することができました。それぞれのナイターで思う存分交流ができ、ナイターの後にも売り場に残って、夜遅くまで歓談をしていた人もいたようです。



ガリ本ダービー

エントリーされたガリ本から、参加者は気に入った1冊を選んでもらうことができる「ガリ本ダービー」を開催しました。企画の発案は峯岸さん。初めて参加した京都の全国大会で、この企画に感動し、「群馬でもやりたい」ということで募集をかけました。ガリ本が

売れなくなってきた昨今，ガリ本ダービーをやろうと呼びかけても，ガリ本自体が集まらないのではないかという予想に反して，16本のガリ本がエントリーされました。どれもとてもいい本で，2冊目3冊目を買ってくれた人もたくさんいました。全国からたくさんの仲間がダービーに参加してくれて，盛り上げてくれたことがうれしかったです。

結果として，交換されたガリ本は259冊で，交換率は約76%でした。そして，交換以外で購入されたガリ本が73冊もあり，合計332冊ものガリ本が，ガリ本ダービーにより参加者の手に渡ることになりました。



- 合宿研はナイターにもすぐ出られるし，大きな風呂にも入れるし，同じ部屋の他県の人たちとも話ができてよかったです。売り場にも長い時間いられたし，よかったです。群馬サークルを中心とした実行委員の人たちが運営をやっていたのが印象的でした。ゆったりとした対応が，こちらもゆったりできてノホホンとした私にはピッタリでした。ありがとうございました。なお，今回「ガリ本ダービー」という企画をしてくださったので，この大会に向けてガリ本を作ることができました。こういう企画がなかったら，

ガリ本なんて作ることが出来なかったと思います。峯岸さんに感謝します。
(5 長野 増田伸夫さん)



おわりに

2007年の北海道（茨戸）大会の時に初めて立候補して以来10年。群馬で一度は「夏の大会をやりたい」という夢が実現し、そして終わりました。立候補が決まってからとても嬉しくて、「さあ、いよいよ始まるぞ」とワクワクしていた1年前を思い出します。

ところが、その1ヶ月後、最愛の妻が肺癌に侵されていることがわかり、介護の日々2ヶ月の後に亡くなり、告別式。絶望的な気持ちの11月12月でした。みんなに励まされて、今年の1月から大会の準備に取りかかりました。

その時には、私の周りの人たちが、心配してくれたり、応援してくれたりしました。自分としては万全の体制にならないうちに、時がどんどん過ぎていきました。私の気持ちがついていかないまま、地元の実行委員会を中心に動き始めてくれました。次から次へと新しい案を出してくれ、準備を進めてくれたので、私はほとんど何もしないうちにいろいろな事が決まっていったように思います。

4月には群馬県教育委員会の後援もとることができ、チラシが完成。全国に発送できたときにはホッとしたことを覚えています。いろいろな場面で本当に沢山の人たちが関わってくれて実現しました。

大会が近づいてくるとまさに怒濤のごとく皆さんが動いてくれて、

生き生きと自主的に動いている姿がとても印象に残りました。大会前泊から最終日までは、本当にあっという間に終わったように感じました。普段、一参加者として参加していたのとはひと味もふた味も違う大会を過ごすことが出来ました。

私が群馬で大会をする大きな目的のひとつに、仮説の夏の大会の雰囲気知らない群馬の人に、少しでも多く参加してもらって、この空気を感じてもらいたい、というのがありました。いろいろと声をかけ、参加者名簿の中に、私の知る群馬の人の名前が沢山並んだことが、とても嬉しかったです。私の教え子（小学校5年・6年と担任した子）が大学4年生となり、サマースクールを手伝ってくれたのも嬉しかったし、今勤務している学校の同僚が、スタッフとして受付を手伝ってくれたことも本当に嬉しいことでした。

大会が終わって参加者の感想文を読んでいるときには、ホッとした気持ちと、幸せな気持ちと混ざり合って、何とも言えない気持ちになりました。夏の大会を群馬の伊香保温泉で出来て、本当に良かったとしみじみと思います。

**大会に関わってくれた全ての人に感謝したいと思います。
本当にありがとうございました。**

